

長く読まれる 「どう童話作家」に

こはらまゆみ
小原麻由美さん
(児童文学作家)



「あなた、
作家になりなさい。」

——本誌の「こよみものがたり」に童話を書いていただいている小原さん。今年度も、六月号と十二月号に掲載されています。

小原 「子とともに ゆう&ゆう」には、たくさんのご縁をいただいています。こちらで毎年募集されている「児童文学賞」にも、多くの作品を応募してきました。何度も落選もしましたが、二〇〇一年度に、短編部門で最優秀賞をいただくことができました。

——小原さんは名古屋市の出身ですし、地元のコンテストで受賞できたのは励みになりますよね。

小原 授賞式の時、当時の審査委員長だった、児童文学作家のタカシヨイチ先生にお会いして、「あなた、作家になりなさい。」って言っていただきました。その言葉もあり、「本を出版できるような作家になる」と決めたいですよ。

——児童文学を書き始めたきっかけはなんだったんですか。

小原 もともと、子どもが大好きでした。短大を卒業してから三、四年は保育士として働いていましたが、他に

Mayumi Kohara



新刊『ありがとうの道』
みんなの命を助けてくれて、ありがとう。



もやりたいことがたくさんあったので退職し、童話を書いたり演劇をしたりしていました。でも、三十歳になる頃に父が急になくなつてしまつたんです。その時、「わたしの作品が本になつたら、天国にいるお父さんが自慢できるかな」という気持ちになりました。それから五年間、いろいろなコンテストに出し続け、賞をいただいたり本を出版できるようになつたんですよ。

児童文学へのこだわり

——児童文学を書いていらつしやい

かせてもらう」ことの楽しさも伝えられる作家がいてもいいのかなという思いから、読み聞かせの活動を始めました。

——書いたご本人の読み聞かせだと、作品に対する思い入れもあるので、より臨場感が出そうですね。

小原 保育士だったこともあり、読み聞かせは得意なんです。また、自分が書いているので、本ばかり見なくても読めるんですよ。子どもたちの顔を見て、心の動きを感じながら読むことができます。そういうライブ感を大切にしていきます。

——本を見ながら読むのと聞き手の顔を見ながら読むのでは、子どもの反応も違うと思います。

小原 声に出した言葉には、力があります。声に出すと空気が振動して、相手の心に響く。これが大事なんです。終わったあとに子どもから感想をもらうこともありますよ。ちゃんと伝わっていることがわかるんです。小学一年生の子でも、わたし

が思いもつかなく感じた方を書いてくれるので

ますから、やはり幼い頃から本を読むのは好きだったんですか。

小原 母が本を読むのが好きだったので、絵本や童話は家にたくさんありました。その中でも、小学四年生くらいの時に母に勧められた、バーネットの『小公女』を、本がボロボロになるまで何度も読んでいました。思い出に残っている大好きな物語です。

——今でも読み継がれている名作童話の一つですね。

小原 中学生、高校生になつて読むと、感じるものがまた違うんですね。成長するたびにわかる感情がある、それが「児童文学」だと思います。「子どもでも読める本」というだけで、大人が読んでみても心に響くものなんです。わたしにとって『小公女』がそうであつたように、何年も読み継がれる一冊の本を長く長く大事にしてもらえる作品を書くことが目標ですね。

——今までにたくさん作品を書かれています。物語はどのようにつくられていくんですか。

小原 『ロンとククノチの木』という作品を書いた時は、熱海にある神社のご神木に触れて、物語が下りてくる感じがしました。もちろんそういうことばかりではないので、しっかり物語の方向性を決めるのですが、悩むこと

すごく新鮮ですし、子どもたちからの感想は大切な宝物です。

——家庭でもぜひ、読み聞かせをしてもらいたいですね。

小原 テクニクなんかなくても、お母さんやお父さんの声で読んでもらうのがいちばんです。家族と一緒に、ページをめくりながら読むきっかけにもなりますよ。ただ、本は一冊千円くらいはしますから、子どものおこづかいで買うのは大変です。それでも、長く読みたいと思つてもらえたら、家に持つて帰つてほしい。わたしの本が、いろんな家庭に届いて、いろんな人に読まれて、何年か先にもう一回、その人の子どもの読んでもらえたらうれしく思います。

強い気持ちがあればできる！

——これから、こんな本を書いていきたいといった目標はありますか。

小原 わたしは一貫して、「命」をテーマに書き続けています。でも、重いテーマですし、子どもたちはおもしろくないと読みません。どうして命を大切にしなければいけないのか、まだわからない子どももいますよね。だからこそ、子どもたちが感じるおもしろさを

もしよつちゆうですよ。動物や物が主人公になる時は、ファンタジーこそリアリティーを重視します。物語に説得力をもたせるために、人と話をしたり公園に行ったり、さまざまな刺激から気づいた自分の感情全てを、作品づくりに生かしています。

——本が売れない時代でもありません。作家の道に進むには勇気がいりませんでしたか。

小原 好きなことは、生きていく力になるほど、何よりも強いんですね。それがわたしには「書くこと」です。家も収入も全部失つても、書く気持ちさえあれば怖くないというぶれない信念をもっているの、何があつても続けていけると思っています。

声で伝える言葉の力

——ご自身の作品を、読み聞かせする活動もされているそうですね。

小原 最近では、新刊の『ありがとうの道』という本を使って、小学校や児童館などで行っています。この本は、東日本大震災の津波で流された桜がひと月後に花を咲かせた、というニュースがきっかけでできた物語です。本離れが進む今、子どもたちに「読んで聞

追究し、感動もしながらその意味が最後にわかる、そんな作品を生み出したいですね。

——「書くこと」が本当にお好きだということがよく伝わってきました。

小原 「目ざすところがある」ということが大事だと、子どもたちにもよく言っています。「なりたい」という願望ではまだ弱いので、「なる」「やる」と強い気持ちをもつことです。わたしは今、子どもは未来に憧れ、大人は子どもの頃をなつかしむ、そんな物語を書き続けられる「童話作家」を目指しているんですよ。

——自分の好きなことができるって、本当に恵まれたことですよ。

小原 数年前、戦争している地域の子どもたちが、おもちゃの銃を持って笑いながら走っている姿をテレビで見ました。その姿に衝撃を覚え、「児童文学作家として、世界中の子どもたちのお母さんになる」と決意しました。銃ではなく、本やノートやペンを持って、子どもたちが楽しめる世界をつくりたい。わたしの児童文学が、少しでも力になれば幸いです。

(文責 編集部)



聞き手
久保田玲子
フリーアナウンサー

プロフィール

名古屋市生まれ。名古屋市立保育短期大学卒。保育士として勤めたあと、作家を目指し執筆活動を始める。「第26回子とともに 児童文学賞」短編部門で最優秀賞・椋鳩十賞を受賞する。その他、さまざまなコンテストで多数受賞。2005年に『ごめんね！ダンスおばあちゃん』（国土社）で出版デビュー。2016年に新刊『ありがとうの道』（PHP研究所）を出版。